



カゲ



マワリ

川崎ゆきお

「日が低くなりよった。こんなに影が伸びておる」

「あなたは、そういうものばかり観察されているのですか」

「ああ、これはこれは」

老人の独り言だが、声が大きかったようだ。それを青年が聞き、突っ込みを入れた。

ただ、見知らぬ年寄りに、若者がそんな簡単に声をかけるわけがない。老人はそれを感じたが、知らないふりをした。

「この道路は、ついこの間までは日が差していた。日影は歩道に少しかかっている程度でね。この四階建てのマンションの前には影はなかった。しかし、今はある」

「いつ頃からですか」

「朝顔の観察日記じゃないのだから、毎日見ているわけじゃない。ふと気が付くと、そうになっていた」

「でも毎日見ていたのでしょ」

「そうだなあ、毎日ここを通るので、見ていたはずなんだが、それは歩道の日影だけかな。車道は関係がないので、見ていなかったのかもしれない。いや、見ていたとしても、意識していなかったんだらうなあ」

「じゃ、どうして今日は車道まで影があるのに気付いたのですか」

「だから、ふとだ。何か道が黒いなあと感じたんだらうねえ」

「でもこの時期、影は毎日少しずつ延びていますよ。だから、分かりそうなものなのですが」

「いや、毎日じゃない。だって、十日以上雨とか曇りで、日が差す時間に見るのは希だよ。だから、かなり間がある。毎日じゃない」

「ああ、そうですねえ」

「ところで、あなたは？」

「あ、通りかかりの者です」

「それだけですか」

「はい、影のことを呟かれていたので、つい声をかけてしまいました」

「おお、それは珍しい。私の独り言に反応してくれる人は結構いますが、若い人は珍しい」

「影に興味があったものですから」

「こういう影をねえ。何か気象の勉強でもされておるのですかな」

「いえ、別に日時計を作るような趣味はありません」

「そうかい、じゃ、なぜ影を」

「影に興味があります。光と影の、あの影です」

「ああ、抽象的な意味での影ですなあ」

「はい、日の当たっていない場所とか人とか、そういったものです」

「おお、それは難しそうだ」

「また、心の闇のようなもの、闇と影とは違いますが、光があるから闇や影が出来る」

「おお、それは哲学ですなあ」

「いえ、そんな大層なものではなく、最近僕のキーワードになっています。だから、影に関係す

るものに気も向きます」

「気も向くか」

「はい」

「確かに向日葵も日を向くねえ」

「ああ、そんな感じです」

「で、君は日じゃなく影を向くわけだ」

「ああ、そうですねえ」

「じゃ、ヒマワリじゃなくカゲマワリだな」

「あ、いいですねえ。その言葉、頂きます」

「はい、どうぞ、持って行ってください」

青年はその後、影の研究をカゲマワリと呼ぶようになった。

了